

「新型コロナ」ワクチン薬害

薬のチェック編集委員会

医学的観点から——害が全身に及ぶ仕組み

ワクチンが有効だったのは初期だけ

2019 年末から流行が始まったいわゆる「新型コロナウイルス感染症」のウイルスの正式名は SARS-CoV-2、感染症の正式名は Corona Virus Infectious Disease, emerged in 2019、略して COVID-19 と呼ばれます。流行開始当初、罹患した場合の致死率(症例死亡率)は数%と極めて重い感染症でした。

SARS-CoV-2 が変異を起こしやすいことは、デルタ株やオミクロン株という名前でよく知られています。最初の臨床試験は株変異のなかった時期に実施され、得られた COVID-19 の発症予防効果は 95% あり、一応効いているように見えました。しかし、2022 年 12 月以降のオミクロン株に対しては、全く効かないどころか、健康者接種バイアスを補正すると、ワクチン接種者のほうが COVID-19 にかかりやすくなっていました。

なぜなら、最初のワクチンは変異のなかった元の武漢株のウイルスに対する抗体を作らせるもので、最初にこれを接種すると、変異したオミクロン株が流行したときに、体はほとんど武漢株に対する抗体しか作らないためです。この現象を「初抗原原罪」または「刷込み (imprinting)」といいます。しかも、抗体はウイルスを排除する抗体だけでなく、ウイルスを増殖させる抗体をも作ることがあるため、ワクチンを接種しない人よりも COVID-19 にかかりやすくなる場合があります。この現象を「抗体依存性増強」といい、動物実験でも確かめられています。

SARS-CoV-2 ワクチンと、その害は

SARS-CoV-2 が人の細胞に侵入する際に重要な役割をしているウイルスの突起部分を「スパイクたんぱく質」または「スパイク」と呼びます。従来のワクチンは、ウイルスを培養してスパイクを精製して作っていました。SARS-CoV-2 ワクチンは、スパイクを作る遺伝子 mRNA を小さい脂質粒子(脂質ナノ粒子: LNP、ナノは 1mm の 100 万分の 1) に封入して注射し、ヒトの体内の細胞に取り込ませて細胞内

でスパイクを製造させる方法を用いています。日本の主流ワクチンを含めてこの製法は人類歴史上はじめてです。

RNA は分解されやすいので、分解されにくいよう脂質に包むなど工夫されています。他のワクチンには、アルミニウムなどの組織傷害性の強い物質を添加して免疫増強が図られています。mRNA を包んでいる脂質の主成分は組織傷害性が強いので、これ自体がアジュバント(増強剤)として働きます。

注射部位からリンパ液や血流に乗って、全身に運ばれ、リンパ管や血管の内壁細胞に取り込まれて mRNA からスパイクを作ります。細胞内に mRNA が入り込み、スパイクができると、血管内壁細胞は異物細胞になるため、免疫系がそれらの排除にかかり、体のあちこちで炎症を起こします。血管のある部位ならどこでも炎症が起こるために、あらゆる病気が起こります。

被害者の会のアンケート結果で、10 種類、20 種類のいろんな症状を訴える人が多いのは、こうした仕組みで全身に障害が起こっているからです(88 頁)。

ワクチン接種後の死因は

接種後に死亡した人の死因をみると、最も危険度が高いのは、肺塞栓症、くも膜下出血や脳内出血などの出血性脳卒中、その他循環器系の病気、次いで心筋梗塞や脳梗塞など動脈系塞栓症による死亡です。若い医療従事者でも高齢者でも共通でした(厚労省が公表した死亡例を本誌で分析)。つまり、血流が緩やかな静脈系や、血管の分岐部にできる動脈瘤(血流がぶつかる部位)で特に血管内に取り込まれやすく、組織傷害を起こしたためと考えられます。

これまでに全くなかった物質を使ったワクチンです。何が起こるかは未知であり、現実には起こっていることを素直に見つめて認識すべきものなのですが、その謙虚さが無い医師・医療従事者が多すぎます。

SARS-CoV-2 ワクチンをやめない限り、薬害は今後も拡大します。(文責: 浜六郎)